AMCoR
Asahikawa Medical College Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

旭川医科大学研究フォーラム (2007.12) 8巻1号:77～78.

学会の動向 第43回日本眼光学学会総会報告

石子智士

旭川医科大学研究フォーラム 8(1) ：77～78，2007

学界の動向

第43回日本眼光学学会総会報告

石　子　智　士*

第43回日本眼光学学会は、旭川医科大学学長吉田晃敏を会長に、平成17年９月８日(土)、９日(日)の両日、旭川市民文化会館で開催されました。旭川市では、昭和58年（1983年）に保坂明郎旭川医科大学名誉教授が開催しましたので、今回は24年振りの開催でした。

この日本眼光学学会は、眼の機能 特に生理光学、レンズ、光学器械、眼計測機器等に関する基礎的、応用的問題の研究、発展に資することを目的として昭和40年発足した学会で、医師のみならず、実際に装置を用いて検査を行う視能訓練士、物理、光学、視覚研究者などの光学関連の研究者、開発者が一同に会する学会で、まさに、基礎と臨床の橋渡しの場でもあることに特徴があります。平成７年からは、眼科用光学機器に関する眼科 ME 学会との合同学会という形で開催されてきました。そして本年度からはこの２つの学会が発展的に融合し、眼光学学会として再出発することとなり、その記念すべき第一回目の学会でもありました。

本学会では、特別講演、２つのシンポジウムに加え、２つのランチョンセミナーを行いました。あいにく、台風の接近によるキャンセルもあり、出席者の減少が心配されましたが、全国各地から42題の一般演題が集まり、この学会に引き続いて行われる「眼鏡に関するシンポジウム」も含め、最終的には350名を越える参加者がありました。

学会第一日目の午前は、「「屈折・調節」関連の講演を中心とした12題の一般講演の後、米国ハーバード大学医学部、スケペンス眼研究所の France J. Van de Velde先生による“Scanning Laser Ophthalmoscope in Developmental History”と題した特別講演が行われました。この Scanning Laser Ophthalmoscope (SLO) は、近年著しい発達を遂げたいくつかの眼科光学機器の基礎となる装置で、Van de Velde 先生は、この装置に関するいくつかの特許も有しています。本公演では、眼底検査のための光学機器の発達の歴史を紐解きながら、SLO によって新たに可能となった検査の変革を詳細に解説していただきました。

昼には、２つのランチョンセミナーが行われました。今回の学会では、特別講演、シンポジウムとも、眼底など後眼部に関するトピックが多く取り上げられていたこともあり、ランチョンでは前眼部に関する講演をお願いしました。ひとつは、「IOL アップデート一次のスタンダードへー」と題したランチョンで、東京慈恵会医科大学三戸岡克哉先生と金沢医科大学佐々木洋先生に、最近話題の着色眼内レンズならびに非球面眼内レンズに関する講演をしていただきました。もうひとつは、「ペンタカム、その基礎と臨床」と題したランチョンで、装置の開発者である Andreas Stinmuller 先生と慶応大学山口剛史先生に、眼球における光学収差を測定できるペンタカムに関する基礎から臨床応用に関する講演をしていただきました。

午後は、日本眼光学学会総会、学術奨励賞授与式ならびに受賞講演からはじまりました。この学術奨励賞は、眼光学学会の機関紙である「視覚の科学」に投稿された論文から選考され、毎年、基礎研究と臨床研究それぞれに贈られています。今年度は、産業技術総合研究所の小澤良先生の「比較的小さな視対象の両眼視差変化が奥行き運動知覚に及ぼす影響」、ならびに中京大学の河本健一郎先生の「二重課題を用いた加齢による視覚情報処理能力の検討」に対して贈られました。

この後、２つのシンポジウムが行われました。はじめのシンポジウムは、最近全国で導入が進むものの、眼科の特殊性から種々の問題を抱えている電子カルテ

*旭川医科大学　眼科学講座

を中心としたもので、「眼科電子カルテとファイリングシステム」という題で行われました。旭川医大経営企画部の廣川博之教授、山上浩志准教授の両名がオーガナイザーを務め、これらを開発している、ニデック、トプコン、日本電気およびピーエスシー、そして富士通の４つの企業から講演をしていただきました。

引き続いて行われたシンポジウムは、京都大学眼科吉村長久教授をオーガナイザーに、「眼科学の最先端」という題で行われました。このシンポジウムでは、現在研究開発中の装置を中心として、これまでの到達点ならびにそれぞれの装置の将来について、開発者の立場から、あるいは臨床評価の立場から講演が行われました。ニデックの大島進先生によるデジタルオフサルモスコープ、トプコンの秋葉正博先生よるフルフィールドOCT、浜松ホトニクスの井上卓先生よる補償光学、東京医療センターの角田和繁先生よるFunctional Retinography (FRG) に加え、旭川医大の石子智士准教授もシンポジストの一人として、Microperimetry に関する講演を行いました。

学会二日目午前は、「視機能」「検査機器」を中心とした一般講演30題が２会場に分かれて行われ、活発な議論が繰り広げられました。とりわけ検査機器に関しては、新しい装置の研究がすすんでおり、今後の発展が期待されています。

眼光学学会自体は、２日目の午前をもって終了しましたが、午後からは「眼鏡に関するシンポジウム」を行うことが恒例なっています。このシンポジウムは、視能訓練士や眼鏡士などのパラメディカルも対象とし、眼鏡の処方に関する臨床的、実践的な知識の取得を目的としたものです。本年は、東京医科歯科大学名誉教授所敬先生にオーガナイザーをお願いし、「累進屈折力レンズ眼鏡処方は如何にすべきか」という題でシンポジウムを組んでいただきました。非常にわかりやすい講演で、パラメディカルのみならず研修医ならびに専門医取得前の先生方にも勉強になったことと思います。

さて、本学会では学会主催の懇親会は開催せず学会前日の理事会の後、理事と招待演者ならびにシンポジストをお招きして、医局員を含めおよそ60名ほどで会長招宴を行いました。旭川市の協力もあり、今話題の旭山動物園の閉館後に会場とさせていただきました。入園後、学会長の吉田晃敏先生からの挨拶の後、小菅正夫園長から旭山動物園の紹介をしていただきました。これに引き続き、ペンギン館、あざらし館、チンパンジー館などいくつかの施設を小菅園長の説明を受けながら視察しました。とりわけ、しろくま館ではもぐもぐタイムをしていただくなど動物園の職員の皆様には大変お世話になりました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。園内視察後はモグモグテラスに北海道各地からの食材を持ち込ませていただき、北海道を思う存分楽しんで頂こうと企画しました。記憶に残る素晴らしい会だったと大変好評でした。

ここにあらためて、第43回日本眼光学学会開催のため、本学関係者から頂いたご支援、ご協力に、心から感謝致しますとともに、本学会を盛会裡に終了でき厚くお礼申し上げます。

なお、旭川医科大学眼科学講座は、2009年12月に第15回日本糖尿病眼学会を主催いたします。御支援の程、何卒よろしくお願い申しあげます。